

## 学生たちの観た日本

大学名： 北京大学

氏 名： 陳麗麗

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

### 4. 日中間の交流

日中間における文化はその多くが源を同じくしていることは疑いがない。そして日中の国民もその差が次第に縮まっている。かつて中国は生活レベルが低かったことから、日中の国民はその外見で判断ができたが、今では両国はますます似通って来ている。

しかしながら、企業ほど私にこうした印象を持たせたものはない。中国企業が現在有している多くの特徴は1980～90年代の日本企業のそれと似ている。20世紀の日本経済最盛期において、日本企業は多くのアメリカ企業を吸収し、追い込んで行った。こうした大規模な進出、気力とチャレンジ精神に富んだ拡張は、中国企業のここ数年の歩みに似たものがある。

経済的には、その歴史から言えば、中国は一定の割合で日本の歩んできた道を辿っている。なぜ日本では支付宝(ALIPAY)のような試み及び従来の金融への変革がないのかという訪日団の学生からの質問に対して、三菱東京UFJ銀行側からは、日本企業はリスクマネジメントを非常に重視しているという回答があった。これには私は、リスクマネジメントに慎重なのは正に20世紀の大規模な吸収によりもたらされた失敗が原因ではないのか？これは正に教訓を汲み取った結果なのだと思うはずにはいられなかった。

私は企業のかつての或いは現在の方針を批判するつもりはない。ただし、中国企業は現在、かつての日本企業にあった若々しさと勢いの段階にある。日本経済は活力が足りないかもしれないが、企業文化、従業員の帰属意識、環境保全意識など多方面の成熟したメカニズムにおいて工夫を凝らしている。

人があって制度が存在する。私たちはなぜ日本文化の多くの素晴らしさに感慨を覚えるのか。それはその文化の真髄を各制度に応用しているからである。日中文化、世界文化には優劣の区分はないが、各民族の現状を構築するのは、いかにその真髄を終始守り、またいかに浮世において利益のために根本的な方向性を見失わないかにかかっている。

大学名： 北京大学

氏 名： 詹文茜

テーマ： 1. 国民性についての理解

### 3. マナーのよさと思いやり

「そのほとんどにおいて、日本人は争いを好むがまた優しく、武を尊ぶがまた美を崇め、横暴だがまた礼儀があり、融通が利かないがまた変わり身が早く、大人しいがまた他人の指図を受けることを嫌い、忠義に厚いがまた裏切りやすく、勇敢だがまた臆病でもあり、保守的だがまた新しい方法を受け入れることを好む。」これは、日本人の国民性について記した書籍『菊と刀』の一文であり、日本の民族性における矛盾性と二元性を総括する上で最も適した表現である。今回の8日間の訪問において最も印象深かったのは、日本人の対人マナーとその中にある矛盾性である。

彼らは対人マナーを非常に重視しており、今回の8日間の訪問において私たちが見学に訪れた企業では、各従業

員は私たちへの対応をするまたはしないに関わらず、皆その場の仕事の手を休めて私たちに挨拶をし、私たちが見学を終えて出発する際には、私たちの車が視界から消えるまで手を振っていた。この他ホームステイの際は、家族同士でも「どうぞ」、「ありがとう」といった相手を敬う言葉を常に口にしており、これは中国ではほぼ見かけないものであった。そしてその後の交流を通じて、私たちは企業内部におけるキャリア重視、先輩社員や上司への敬意、日常生活における様々な場面で他人への尊重を示すといった日本におけるマナーへの重視について、強く体感した。しかしながら、多少規格化またプロセス化されたようなマナーにあって、私はホストファミリーの後藤さんの考えを尋ねたことがあるが、彼の回答はストレスが大きいというものであった。この点について、大阪大学での交流の際、多くの大阪大学の学生も似たような考えを持っていた。このことから、日本の多くの人は日本の人間関係において必須なマナーというものに圧迫感を感じながらも、こうしたマナーの下で秩序だった生活を送っており、この矛盾がおそらく日本国民の心に重苦しい感情を形成している根源なのだと感じられた。

**大学名： 北京大学**

**氏 名： 馮莎莎**

**テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術**

日本のこれらの企業を見学し、同時に中国国内の状況を振り返り、私は環境保全技術や自動化技術が今後中国においてニーズがますます高まっていくと感じた。

中国国内の環境問題は現在非常に重大な状況にあり、首都一帯のスモッグは長い期間に渡り人々の健康に影響を及ぼしている。私たちは経済的で効果的な環境保全技術を切実に求めており、こうした技術と付帯した政策の実施があってこそ環境問題は改善されていく。環境保全技術には、石炭脱硫廃水処理、生ごみの発酵利用、家電部品の回収等の技術が含まれ、石炭からの二酸化炭素排出、水資源(汚水、重金属)そして土壌汚染を減少させることをその目的とする。だが相応の技術的サポートがなければ、政策があってもその実施が非常に難しいものとなる。日本はかつて環境汚染による発展の段階を経験しており、すでに技術と整った政策体系を有しているため、中国としては学ぶべき点がある。

中国の人件費は現在上昇を続けており、沿海地区における多くの労働集約型産業は東南アジアなどへ移転をしていることから、自動化の技術は次第に重要なものとなっている。トヨタ自動車の生産工場内の自動化レベルはとて高く、ロボットのアームを利用し精度と効率を高めていた。パナソニックは材料の回収の際、材料の異なる性質を巧みに利用し自動分離を実現していた。浪速運送では自動化のレール輸送と分類保存を採用し、労働強度を大きく削減し、業務効率を高めている。これらは今後中国において大きな需要が見込まれる。

以上の技術はいずれも一国家や地区における科学技術のハードパワーとなっており、発展途上の中国が今後育成また強化すべき点である。現在、国の科学技術に対する重視度合もますます高まっており、人材の導入そして科学技術の成果の保護や表彰に力を入れている。それと同時に、多くの先進国における技術化は中国より進んでいることから、私たちは外国との提携や技術の導入による学習を強化すべきである。

**大学名： 北京大学**

**氏 名： 楊涵**

**テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術**

今回の8日間の訪日を終えて、私はとても深い感銘を受けた。私にとって非常に印象深かったのは日本の大企業の環境保全意識で、正常な企業運営と同時に環境保全技術を常に忘れていないことであった。私たちが見学したパナソニックエコテクノロジーセンターでは、パナソニックおよびその他の家電企業が生産した使用済家電の回収を行っている。そしてこの回収過程はとても衝撃的であった。家電毎に専門の回収ラインがあり、家電の異なる材料については分解利用の原理を採用している。浮力、赤外線反射波長などは、私の日常の授業でも関わることもあるが、こうした書籍の知識に対する柔軟な運用は私たちが学ぶべきものである。

全体的に、こうした環境保全技術の原理を突き詰めると、特別に高度なものというわけではなく、私たちにも構築することは可能だが、問題なのは私たちが多くの経費を掛けてこれらを構築する意思があるのかどうかである。我が国の現在の使用済家電回収は主に政府の奨励金に頼っており、専門の回収事業者も未だ多くは存在していない。こうした点も、我が国の大部分の市民における使用済家電の回収意識の脆弱さにつながっている。そのため、日本のこうした環境保全技術は私たちが学ぶべきものであり、これもまた私たちが環境保護においてできる最も直接的な貢献なのである。

**大学名： 北京大学**

**氏名： 李静昀**

### **テーマ： 1.国民性についての理解**

日本に来て以降、日本語ができない全ての人が最初に覚える日本語はきっと「有難うございます」である。日本のスタンダードな笑顔と親切さは最も私的に印象深いものであった。皆は日本が親切な民族で、礼儀のある国だと感じている。しかし大学での交流とホームステイでの経験を通じて、私は日本をさらに知ることができた。私は、日本とは礼儀があるが人と人の関係が希薄で、非常に個人を重視する国だと思った。

実のところこれは分かりやすいことであり、互いが礼儀正しいほど、その関係性は親密にはなりづらく、熱愛中のカップルは相手に対して客のように接することはないのである。礼儀はもちろん重要であり、人の他人への尊重を示すもので、その人の教養の表れであるが、もし家庭内においても礼儀を重んじていては疎遠すぎると言わざるを得ない。ホストファザーの話によれば、日本人は実のところ互いに友人になりづらく、人と人の関係性が中国に比べて冷淡とのことである。それでは、礼儀とは人々が自分のために作った他人との障壁で、互いに尊敬し、互いに邪魔せず、互いに深く関わらないということなのだろうか。中国では、実のところ多くの友情というものは貸し借りを通じて発展していく。そして日本では、人々は礼儀により互いに境界を設けており、一見礼儀があり付き合いやすそうだが、実際は互いに相手の内面まで踏み込むことはとても難しいのである。

そしてこれはエリート教育の発展における必然性に似ている。私は一般的な小・中学校から市の名門高校、そして全国でも一二を争う大学への進学を通じて、人々の社交性やマナーは次第にレベルが上がり、互いの距離は次第に疎遠になっていくということを実感している。激しい競争は優れた第一印象や、自己の高効率性およびefficient relax (能率的リラックス)を求めており、これが完全な礼儀や自己の時間に対するハイレベルな把握をもたらし、それに日本の伝統文化の影響が加わることで日本のこうした国情を形成しているのである。

これが良いことなのかどうかは何とも言えない。しかし多くの人は、言葉遣いが悪く横暴な人よりも、規則正しくその場を弁えた立ち居振る舞いをする人をより好むであろう。だからこそ、日本の礼儀というものについて中国はさらに沢山学んでいかなければならないのである。

大学名：北京師範大学

氏名：陶悦

### テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本語を学ぶ以前から私は日本人が礼儀を重んじることについて多少耳にしていた。そして日本語を学んだ後、こうした印象は日増しに強くなった。そして今回、私はついに日本の地で純和式の礼儀の雰囲気を経験できることとなった。

私が日本人から受ける最も大きな印象は、その細やかさで、彼らの他人への心遣いもまた非常に行き届いている。ちょっとした例を挙げると、日本のトイレ（トイレを例にするのは、日本のトイレがとても好きだから・・・）には水の流れる音を発する装置である音姫が備え付けられている。日本人は自分が用を足す際の音を他人に聴かれることで他人に迷惑を掛けたくないという思いからこうした独特の製品を作ったのであろう。

ホームステイの二日間においても、私は日本人特有の細やかな気遣いを感じることができた。ホストファザーとホストマザーは辛いものが苦手ということであったが、私が辛いものがとても好きだと聞いて、ホストファザーがわざわざ自ら厨房に立ち、家にある辛い食材を使った麻婆豆腐を作ってくれたのである。ホストファザーが作った麻婆豆腐はとても美味しかった。そして彼のこうした気遣いに、私はとても感動させられた。

この他には、エレベーターに乗った後、ドアの開くボタンを押し続けて後から乗る人がスムーズに乗れるようにする、エスカレーターでは片側に立ち、急いで通る人のためにもう一方を空ける、電車内では電話を掛けずまた大声で話をしない、デパートなどで不注意で他人にぶつかってしまった際には一声お詫びをするなど、これらは一見些細な事だが、正にこうした些細な事が日本人の他人への心からの思いやりを表しているのである。

今回の日本訪問により私は少し変わることができた。中国には「己欲立而立人、己欲達而達人（己立たと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す）」という古語がある。自分の事だけに固執するのではなく、他人をより思いやることで、社会全体がより素晴らしいものになっていくと思う。

大学名：北京師範大学

氏名：劉迪

### テーマ：6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

気が付くと、私たちはすでに日本で8日間の時間を過ごしていた。この8日間において、私たちは歴史ある著名な都市である大阪、賑やかな都市である名古屋、風光明媚な箱根そしてせわしい首都の東京などの場所を訪れた。東から西、南から北へと日本の各都市はいずれも北京とは異なる透明感を醸し出していた。今の日本は少しの汚染もない国だと言える。

四日市ぜんそくや水俣病そしてイタイイタイ病を経験した後、日本はそうした現状の改善を決心した。つまり資源豊かな「金山・銀山」のみならず生態環境が整った「緑水青山」も追求するということである。そしてさらに狭い国土面積と乏しい資源が日本人の科学や自然を尊重する理念を育んだのである。

日本では大小様々な企業があらゆる方法を尽くして資源を循環利用している。例えばパナソニックエコテクノロジーセンターでは、使用済家電を回収した後、その家電内部の利用可能な金属を取り出し新たな家電製品を産み出している。そしてトヨタのハイブリッドカー。さらにホテルニューオータニの生ごみ回収システムでは化学肥料を作り農家に提供している。省エネはすでに日本人にとって一種の習慣となっている。そして科学技術は彼らにとって、自然をより素晴らしいものにする手段であり、利益を得るための仕事ではないのである。

中国は今まさに経済体制改革における産みの苦しみの時期にある。経済をより持続可能で健全に発展させるために、私たちには環境保全など第三事業の発展というサポートが必要である。中国の市場は大きい、資源には限りがあり、いつか枯渇する日が来る。私たちは準備を怠ることなく、環境保護や資源節約をスローガンとするだけでなく、それ以上に社会的な習慣としていかなければならない。

大学名：北京師範大学

氏名：賀婷雅

テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

3. マナーのよさと思いやり

訪日以前から私は日本の集団帰属意識に関する見解を聞き、そしてまた文章を見たりしていたが、それはどういった帰属感なのかについては完全には理解することができなかった。しかしこの「走近日企」という活動は、私たち中国の大学生が自然な形で日本を知り、さらに日本の集団帰属意識について認識できたという意味で、本当に貴重であった。ホテルニューオータニでの見学の際、解説のスタッフの誇りに満ちた語気、活力に満ちた姿、大きく響く声は、すでに彼の仕事への情熱や自分の属する会社への帰属感や共感を示していた。そしてホームステイ先のおとうさんの車は自分の勤務先(トヨタ)の車であった。またその他の交流の際にも、ほとんどの場合彼らは自社製品を使い、さらに自社に関係のある場所で買い物をしていることに気が付いた。誰も退勤後もこのようにするよう要求してはいないのだが、日本人には自分の仕事、自分の会社、社会、国との共通認識や帰属感がある。多くの場合において彼らは、自分自身が個人というよりも、自分の会社や社会そして国を代表していると感じているのかも知れない。

日本での8日間では、終始日本人のマナーや他人への思いやりを感じることができた。それは料理を出す際にゲストの利き手に基づきどちら側から出すかを定める、また一度眉をひそめただけで冷たい水を好まないことに気が付くというほどである。こうした細やかさは毎日の人付き合いと物事に接する態度から公共スペースにおける様々なつくりや利便性にまで活かされ、これらは人に落ち着きと安心を与えてくれるのである。

大学名：北京師範大学

氏名：蒲飛宇

テーマ：3. マナーのよさと思いやり

私だけでなく、多くの中国人は日本がマナーを重んじる国だということを知っていると思う。しかし、もし自ら体験しなければ、その印象は強くはないと思う。

日本では、朝から晩まで、勤務中から日常生活まで、いずれも相応の言葉遣いがある。朝や日中、夜に顔を合わせると、彼らは決まって挨拶をしてくる。他人のサポートを受けた際には感謝を述べる。他人に迷惑をかけた或いは他人を傷つけた場合はお詫びをする。客が入店した場合は「いらっしゃいませ」と言う。店を離れる際は「またのご来店をお待ちしております」と言う。食事の前には手を合わせ(必ずではない)「いただきます」と言う。食事の後は「ごちそうさまでした」と言う。電車などの公共スペースでは、静かにしているなどである。だが実のところ中国もそうなのである。だから両国には共通点や歴史的関係があり、また交流できる点が多く存在しているのである。

日本人は他人に迷惑をかけることを嫌い、同時に他人へとても配慮する。これも実はマナーの一部分である。私が大阪城で散策していた際、早朝で人は特別多くはなかったが、その中でも体を鍛えている人の割合がとても高かつ

た。私の後ろでジョギングをしていたとある中年男性が転んでしまい、私がすぐに「大丈夫ですか」と声をかけて助け起こそうとした際、彼はすぐに立ち上がり、汚れを落としながらうなずいて「大丈夫、全く問題ない」と言い残し、ジョギングを再開したのである。ホテル内のエレベーターでは、いつも誰かがドアのボタンを押し続け、その人が最後に乗ったり出たりし、周りの人も次々と謝意を述べていた。レストランのウェイターやウエイトレスはいつも優しく挨拶をし、またカーテンを閉めることで食事の際のまぶしい日の光を遮るなどしてくれた。ホームステイの際は、自分の部屋に戻りドアを閉めると、そこから先はホストファミリーも私に一人の自由な時間を与えてくれた。また狭い道では相手側が常に体を横にし、道を開けてくれた。電車では人々が電話で話し込むことなく静かな環境が守られていた。

私は、これがマナーを守る日本人の姿だと思った。

**大学名：北京師範大学**

**氏名：呂家樂**

**テーマ：1.国民性についての理解**

8日間の訪問と交流を通じて、私は日本について全く新たな認識を持つことができた。その中でも最も印象深かったのは、ルールの遵守である。これは全体的な特徴であり、国民性と言っても過言ではないであろう。

「ルールを守る」というのは、大体の意味として社会面や法律面からの制約の遵守であり、きまった規則に基づいてそれが行われる。日本はとてルールを守る。時間への厳しさ、または仕事への厳しさや繊細さそして真剣さを問わず、皆「ルールを守る」という国民性に帰結している。

こうした品性により、日本の製品品質は素晴らしく、世界中の消費者から好まれている。その意味では、我々は日本の国民性に感謝しなければならない。日本文化のその繊細さもまた世界の人々を引き付けている。日本の人材はまたその真剣さにより世界の各分野において活躍している。しかしこれには「度」つまり程度の問題が含まれている。ルールを守るのは確かに利点も多いが、ただしルールを守るがあまり柔軟性を失うことがあっては、その影響は利点だけでは限らないであろう。

一つ例を挙げてみる。科学研究分野において、日本の学者は最初に大量の資料を集め、その後先人の研究の方法やルートを踏襲し、従来の分野を深く掘り下げる場合が多く、別の方法を探る、そして最初から未知の領域の探索をすることはなく、ましてや新たな研究方法については敬遠する傾向にあるが、これはルールを守ることの弊害ではないのだろうか。

国民性の問題については、わずかな文章では言い表すことはできないが、日本におけるこうした明確な諸刃の剣の問題は、中国人として深く考えるべきものである。

**大学名：北京理工大学**

**氏名：居絲薇**

**テーマ：3.マナーのよさと思いやり**

今回の訪日で印象深かったのは、マナーの良さと思いやりである。

こうした認識は様々な過程を経て形成された。

11月23日の事前説明会の席上、とある日本の大使館職員がお別れの際にお辞儀をしながら数メートル後ずさりした光景を見て、私はとても衝撃を受け、日本人のマナーについて基本的な認識が得られた。

次いで日本に到着後も、日本のサービススタッフのマナーや態度は印象的で、笑顔やお辞儀はすでに一種のシンボルとなっていた。サービス業のマナーや気遣いが業界の要素というのであれば、ホームステイの2日間において私は日本の一般市民のマナーや気遣いを体感し、多くの部分で非常に感動させられた。

ホストファザー以外は中国語を話さないにも関わらず、彼らは私が快適に過ごせるように車内や家の中では中国語の曲や番組を流してくれた。そして日本人は普段冷たい水を飲むが、中国人は普段お湯を飲むということで、彼らはわざわざ私のためにお湯を沸かし、就寝前には水筒にお湯を入れ、私がいつでも飲めるように準備してくれた。

またホームステイ先には1967年製のクラシックカーがあり、私が興味を持ったのを見て、ホストファザーは私を車に乗せてくれた。

こうした事から、日本ではサービス業であれ一般市民であれ、いずれもマナーを重視し、非常に相手を気遣うことが分かった。

**大学名：北京理工大学**

**氏名：王韞**

**テーマ：3.マナーのよさと思いやり**

日本人がとても礼儀正しいことはかねてから聞いていたが、実際に体験するまでは私としてもそれを断言できなかった。しかし今回の訪日を通じて、私は心から日本人のマナーは素晴らしいと思った。

訪日初日から紹介する。私たちが首都空港の搭乗口から搭乗する際、二人のスタッフが私たちの搭乗を歓迎する横断幕を掲げ、私たちにしきりにお辞儀をする光景を見て私はとても感動した。私たち訪日団は人数的に全体のほんの一部に過ぎないにもかかわらず、彼らはこれほどの準備をしてくれたのである。

日本に到着後、私たちはさらにこうした情熱を感じた。空港やホテル、デパートのスタッフが皆笑顔で応対する以外にも、街中では目線が合えば、皆笑顔で会釈をする。

ホームステイの際、こうした感覚はより明確になった。外出時はホストマザーはいつも荷物を持ち、写真撮影をしてくれて、またトイレに行かなくてよいかなどを私に尋ねてくれた。帰宅後は、夕食時にホストマザーの弟さんが、こうしたもてなしは年に二回だけで、この日は私のため特別に準備したものと教えてくれた。それから私がパジャマを持参していないことを知ったホストマザーが、わざわざ私のパジャマを買ってくれた。こうした様々な体験により、私は日本のマナーについて深く知ることができた。

日本人の親切さはとても心温まるもので、お別れの際、私の心は感慨に満ちていた。手を振る人たちの姿が次第に遠くの景色に消えていく中で、彼らの優しさが絶えず心にしみ込んできた。

**大学名：北京理工大学**

**氏名：呉玥瑩**

**テーマ：2.集団帰属意識の強さ**

日本での8日間の訪問が終了した。期間中私たちは6つの企業、2つの大学の他、日比谷松本楼での見学や中国駐日大使館への訪問を行った。今回のスケジュールを通じて最も忘れ難く感動したのは、ホストファミリーと過ごした2日間であったが、最も述べたい事は日本企業における責任感である。

彼らの責任感は、一に企業が多額の教育を担当、二に周辺住民との関係重視、三に環境保全や省エネに対する自

己要求という三つの面に表れている。

まず、私たちが見学した企業では、小学生たちの見学後の作品などが掲示されていた。ハイテク設備が並び、一見重々しい雰囲気の中でこうした作品を見かけると、可愛い子供たちが色鉛筆で真剣に作品をつくる様子が目に浮かび、心が安らぐ感じがした。

次に、私たちが訪れた企業はいずれも内部は静かであった。工場にとっては絶対的な静けさというのにはあり得ないが、それでも各企業は生産時の騒音を可能な限り減らしている。また定期的に周辺住民の代表を招き意見交換をするなど、最大限周辺住民への影響を減らし、良好な生活環境を保証している。

最後に、私が最も感銘を受けたのは彼らの環境保全や省エネへの重視であった。パナソニックは資材のより良い活用のため多くの資金を使用済家電の処理に注ぎ込んでいる。トヨタは環境に優しい新エネルギー自動車(利幅が大きくないにもかかわらず)を研究開発している。三井物産は中国西部の緑化構築の支援を行っている。イトーヨーカ堂配送センターでは衣類をハンガーに掛けたまま運ぶ方式で段ボールの使用を節約しているなど、各企業は自らが省エネや環境保護へ貢献すべきと考え、またそれらを実践している。

こうした点は中国企業にもっとも欠けていると思う。中国企業は現在大きく成長しているが、その多くは自身の発展のみに目を向けている、或いは利益追求のため「進歩」している。また当然この利益は、彼らの経費を増大させる省エネ・環境保全への転換とは関係がない。私たちは日頃環境が悪い、スモッグがひどい、水質汚染がひどいなどと文句を言っているが、企業がこれまで以上の社会的責任感を持ち、部分的な次世代教育を担い、子供たちに環境保全措置について知ってもらい、企業自身が周辺環境への影響を調整し、さらに自身の生産方式を環境に優しいものにすることで、中国も美しい青空を守ることができると思っています。

パナソニックでの見学時、次のような話を聞いた。私たちはかつて美しい空は有り余るもので、清らかな水や感動的な自然は溢れんばかりの物だと思っていた。しかしこれらは今となっては非常に貴重なものとなっている。私たちは普段、欲しいものはいくらでも手に入られると考えがちである。だから貴重さがわからず、物の価値も軽視されて浪費される。しかし物の効用を完全に発揮することは人の責任であり、現在、より重要なのは「大切にする」ということである。すべての企業が「大切にする」ことの貴さを理解し、「責任」と「大切にする」を実践することを願っている。

**大学名：北京理工大学**

**氏名：張晨曦**

## **テーマ：6.今後ますます中国でニーズが高まる技術**

日本は技術強国であり、ハードウェアまたはソフトウェアであれ、トイレまたは自動車であれ素晴らしい。そして多くの技術分野の中でも、環境保全技術は世界の最先端にある。

二日目に見学したパナソニックエコテクノロジーセンターでは、たくさんの先進的な除去方法で異なる材質について分類がされていた。その後のトヨタ自動車の工場では、世界でも最先端のエコカーについて知ることができた。またイトーヨーカ堂配送センターでは、最新の物流方式により段ボールの使用を減らしていた。そしてホテルニューオータニでは、進んだ技術によりホテルで発生するごみの100%回収を行っていた。

こうしたことから、異なる分野の工場においても、各自それぞれ資源の回収処理や資源消費を減らす方法が存在していることが分かった。日本のこうした方法の普及度合は世界でも最先端である。これらは常に最悪の事態に備え準備を怠らないという居安思危の表れである。日本という国が資源に乏しいことがこうした部分をもたらした原因なのかもしれない。しかしたとえ中国に多くの資源があっても、いつかは無くなる日が来るのである。そのため、私たちもより環境に優しい発展をし、将来に備えなければならないのである。



大学名：北京理工大学

氏名：趙家樑

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

#### 日中両国のマナーの違いと国民の素養について

日本での8日間で、私は日中両国のマナーにおける大きな差を感じ、さらにメディアなどで日頃言われている中国人の素養の低さの問題について考えてみる事ができた。

まずこの問題について気が付いたのは大阪大学の学生との交流の時であった。私たちの討論テーマは日中双方の印象で、日本人には中国人の素養が低いという印象があるかという問題について問われた際の日本の学生の観点に、私たちはとても驚かされた。彼らの見方は主に、1.一部の中国人には確かに割り込みをするなどのマナーの悪い行為が存在する。2.どうすべきかを教えれば、中国人は自発的に行為を正す。原因はマナーの違い。3.一部の日本メディアは中国人観光客を中傷することに没頭している、というものであった。そして実際に私もこうした点を感じた。中国では右側通行で日本とは逆なため、階段の上り下りやエスカレーターでは知らないうちに反対側に立ってしまうことから日本人の誤解を招いているのではないだろうか。また日本における行列は中国とは異なり一つの長い列となり、最後尾で複数にわかれるが、中国では最初から複数の短い列になる。そのため日本に来て間もない中国人は、そうした事情を知らず複数の列を作ってしまう(私も同様)、割り込みだと誤解されているのではないだろうか。そして私たちのグループ内の中国旅行経験者やホストファミリーからも、ほぼ同じような観点が得られた。彼らは中国人が列車などで、大声でおしゃべりをしたり、遊んだり、食事をしたりするのは一種の文化の表れであって、マナーが悪いということではないと考えている。この点は私のこれまでの観点と大きく異なるものであった。

訪日の最後に、こうした問題について私は色々考えさせられた。国際化のプロセスにおいて、私たちは他国を崇拝しすぎなのではないだろうか。自国の多くの風習は、本当に悪いものなのだろうか。中国が発展をする過程において、私たちが傲慢にも卑屈にもならないことを願っている。

大学名：北京語言大学

氏名：呉繼

テーマ：4.日中間の交流

以下は、大阪大学での交流を通じての私の感想である。

大阪大学での交流を通じて、私は現在の日本人、日本の若者は中国への知識が少ないことに気が付いた。ここ数年多くの中国人が日本を訪れているが、日本人の眼には、中国人は精進を知らずお金を使うことしかせず、考えることや努力をしない人々と映っている。

現在日本人が目にするのは、日本で爆買いをするマナーを知らない中国人だが、今回の交流を通じて、実際のところ現在の日本の若者も、私たちが出会った一世代上の日本人ほどしっかりしているわけではないということに気が付いた。

今回の訪日を通じて、私たちは日本人のおもてなしについて体験することができた。某団員が言うように、彼らサービススタッフが仮に心の中で私たちを軽蔑していたとしても、彼らは少なくともゲストに向けるべき尊重や心遣いを示しており、またそれは誰の心も和ませるものである。

大学名：北京語言大学

氏名：閔良博

## テーマ：2. 集団帰属意識の強さ

人々が仕事やお金儲けの場所と考える中国の職場とは異なり、日本の企業は一種の帰属感を体現しており、企業の一員となることは自分と企業が同じ命運でつながれることを意味している。私は正にこの点から日本人の集団帰属意識の強さを感じた。

トヨタ自動車元町工場の見学の際、スタッフの紹介を通じて私たちは元町の人口の7割以上が元町工場の従業員であることを知った。私は、ここでの生活はきっと元町工場での仕事を中心に、元町の一員になる最も重要な条件は元町工場の一員となることなのだろうと思った。

こうした現象は、ホームステイの際も感じる事ができた。ホストファザーの城谷さんは住友商事の従業員で、普段の生活においても自分の勤める企業への帰属感が表れていた。まず城谷さんは住友商事の紹介をホームステイの一部として同企業の状況を私に詳しく紹介してくれた。その後城谷さん一家と近所のスーパーへ夕食の食材の買い出しに行った時、近所には多くの住友商事の従業員が住んでいることを知った。そして彼らは日頃住友グループの子会社であるこのスーパーを利用している。そして私の趣味がサッカー観戦だということで、Jリーグの優勝決定戦を観戦したが、家族全員が住友グループがスポンサーとなっているチームを応援していた。

この様に、彼らの企業への帰属感は、企業を一つの大家族として結び付けている。そしてこうした帰属感が国レベルに高まった時に、国が自然とこれ以上ないほど一つに団結するのである。

大学名：北京語言大学

氏名：沈丹

## テーマ：4. 日中間の交流

日中国交正常化からすでに40年余り経っているが、両国の友好関係は未だ充分明確とは言えない。歴史問題以外のその一つの重要な原因は双方の交流不足による相互信頼の欠如にある。そんな中、「走近日企・感受日本」の活動は正に交流の機会を提供するものである。私たちは日本を訪れ、日本を体験し、日本の人々もまた私たちを通じて中国を理解するなど、相互理解を効果的に高めてくれるものである。

今回の日程における重点の一つとして大阪大学への訪問があった。大阪大学では、双方の青年が友好的に交流を行った。日中両国は共に漢字を使う国で、伝統的文化においてもその源を同じくする部分が多いが、双方には意識の面において大きな差が存在していた。私たちのグループは恋愛観における日中文化の比較について討論を行った。日本の学生は中国のカップルは関係がベタベタすぎて、よく公の場所でいちゃついていると考えている。一方私達も1ヵ月に一度会えればいいとする彼らの考えにとっても驚かされた。またこうした違いは恋愛のその他の面にも表れており、もし事前に知っていなければ誤解を生みやすい。この他、ネット上ではしばしば日本人は冷たいとする意見を目にするが、今回のホームステイにおける私の体験はそれとは全く違っていた。福島さん一家は心からの優しさで「外国人」の私を包み、あらゆる面で私を気遣ってくれた。福島さんの奥さんは、私がまだ学生で経済力に限りがあることを踏まえ、買い物の際は数ヵ所を比較・確認してくれた。彼らの優しさやマナーの良さは、決してそうしたふりをしているわけではなく、あらゆる些細な点から感じ取れるものなのである。

日中両国の未来には私たちの努力が不可欠であり、両国の交流は非常に重要なものである。現在は様々な原因により中国を訪れる日本人の数は多いとは言えないが、彼らがメディアによる「中国に対する悪者扱い」の影響を受け

ず、中国の青空を見に来てくれることを願っている。

日中両国の交流と理解には、まだまだやるべきことが沢山ある。

**大学名：北京語言大学**

**氏名：韓璐璐**

**テーマ：3.マナーのよさと思いやり**

#### **4.日中間の交流**

今回私は学生の代表の一人として、第19回「走近日企・感受日本」の活動へ参加し、客観的にそして深く日本について知ることで、日本への新たな認識を持つことができた。

まずマナーについてだが、飛行機への搭乗、工場見学、大学での交流、ホームステイを問わず、私たちは日本人たちの温かなおもてなし、そしてマナーの素晴らしさを感じることができた。他人の立場に立って物事を考え、可能な限り他人へ迷惑をかけない、これは日本人に共通した態度であり、彼らはその考えを日頃から実践している。またこうした考えを次の世代に伝えることで、日本国民の高い素養が次第に形成されていった。

この他、日中両国の交流も日増しに密接になり、民間の経済交流であれ文化交流であれ、いずれも増加傾向にある。日中両国は一衣帯水の隣国で、かつ世界で第二・第三のエコノミーを形成しており、大国と小国の交流と言うよりは、二つの大国の交流と言うべきである。今後も両国が互いのサポートを必要とすることは必然であり、民間交流のたゆまぬ努力の下、両国の関係はきっと新たな段階に入ると信じている。

「学生たちの観た日本」はつまり、細かな部分から両国の違いを発見し、その差を縮めていくということである。そのためには国全体の持続的発展を追求すると同時に、細かな部分もおろそかにはできない。今回は世界的企業について深く知る以外に、人や物事への接し方、環境保全意識などの面でも我が国の未熟な部分を知ることができ、日本のように経済と精神面が共に高く発展するためには、私たちのすべき事はまだ沢山あるということに気が付いた。しかし今回の活動により私たちは両国の差についてはっきりと認識することができ、これは私たちがすでに第一歩を踏み出したと言える。日中双方のたゆまぬ努力の下、中国の未来、そして日中両国の関係はきっとますます良くなっていくと信じている。

**大学名：北京語言大学**

**氏名：陳婧怡**

**テーマ：2.集団帰属意識の強さ**

#### **3.マナーのよさと思いやり**

8日間の「走近日企・感受日本」大学生訪日活動において、私は代表団の一人として、これまで中国国内で「見たり」または「聞いたり」した様々な事について実際に体験をした。

集団帰属意識について私が最も印象深かったのは、トヨタ自動車の工場見学の際、豊田市で路上を走るほぼすべての車がトヨタ車であることを知り、さらに解説の人から豊田市の8割の人がトヨタ関連企業に勤めているとの紹介があったことである。同社は本当の意味で「クルマづくりを通じて社会に貢献する」という理念を実現し、街全体がトヨタ車を支持しているだけでなく、多くの人がトヨタの会社に勤めていた。これは一種のグループへの帰属感と言うものであろう。全市民が自分の街で生まれた会社を支援することは、人々の集団意識を物語っている。それから某団員の話で、

彼のホームステイ先で使用している冷蔵庫やテレビそしてエアコンなどの家電製品は、すべてホストファザー自身が勤めている会社の製品であったとのことで、これは会社と従業員の相互信頼を表している。中国の人々もこのように中国産を支持し、民族意識と集団帰属意識を併せ持つようになることを願っている。

中国では、日本のマナーの話になると皆が口をそろえて称賛する。中国は「礼儀の国」を自称しているが、仮に日本も「礼儀の国」を自称してもおかしいことではないと思う。ましてや中国国内の一部の業界におけるサービス態度は確かに日本には及ばない。出発初日、私たちは飛行機内で日本のフライトアテンダントの親切なもてなしを受けた。また企業見学や大学での交流を終え、その場を離れる際はガイドの方から車外で見送る人たちへの「ガラス拭き」をするよう話があり、私たちは両手を振って車外の人たちへ別れを告げた。そして彼らも笑顔で私たちの姿が見えなくなるまで手を振って別れを惜しんでくれた。これにはとても感動させられた。そして最も印象深かったのはホームステイである。日本には一家それぞれが一つの湯船で入浴する習慣があるが、ホストマザーは早々に湯船にお湯をため、私を最初に入浴させてくれたのである。そしてホストファザー、ホストマザーとお子さんが次いで入浴した。これには、彼らの細やかな気遣いを感じた。

日本での8日間はあっという間だったが、内容は非常に濃く、私たちは企業、文化、大学、一般家庭などあらゆる視点から本当の日本について知ることができた。私は、日本の様々な文化を自らが体験することで印象がより強まり、帰国後もこうした細かな部分を覚えていられると思う。そして自身の感想などを周りの友人へ伝えることで、日本の優れた文化を知ってもらい、それがゆくゆくは中国の人々の集団意識の強化と他人への接し方の改善につながると思う。これらはいずれも私たちが学ぶべきものである。

**大学名： 中国農業大学**

**氏名： 呉延淞**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

初めて日本を訪れ、私は日本人の礼儀正しさ、特にサービススタッフの親切さや気配りの素晴らしさを感じた。私たちのバスの運転手さんは、私たちが下車するたびに、「お疲れ様でした」と声をかけてくれたので、私自身も運転手さんへお辞儀をして感謝を示した。これは好循環と言えるもので、とても素晴らしいと思った。だがその後数日日本での様々な体験を通じて、日本の礼儀と言うものは、時に制約が多く、沢山の人がいやいや守っていると感じた。自発的でない礼儀は見ているととても疲れるし、重苦しいものである。そうして日本人の礼儀というものに対して、これまでとは違った印象が得られた。

大阪大学では、グループ内の中国人留学生との交流を通じて、日本人のマナーについてさらに認識と理解を深めることができた。日本社会における様々な事には多くのルールが存在しており、日本人が物事进行处理する場合もこうしたルールや方式に従って行うため、一種の儀式の感覚がある。しかしそれと同時に相応の問題も生まれる。例えば、とあるサービススタッフがその日に機嫌が悪くても、笑顔で客対応をしなければいけない。何をすることも形式が結果よりも重んじられる。例えば日本人は会議好きだが、こうした儀式は全体がまとまり一つのことを成し遂げるには有利だが、同時に日本人が普段からこうした儀式の繰り返しに耐えることで、人本来のあり方への追求や個性の発揮が疎かにされ、日々の生活が重苦しくそして精神的負担の大きなものとなっている。

だからこそ、日本では至る所に居酒屋があり、とても賑わっている。一日の仕事を終えた人々がストレスを発散し、自分自身を取り戻すのである。日本人はお酒が入ると人が変わったようになり、思いも寄らないことをしたりする。個人的には日中両国の方式には一長一短があり、互いが補い合い両者のバランスをとることが最も賢明な方法で、柔軟性と余裕を持つことが大切だと思う。

大学名： 中国農業大学

氏 名： 張洋中正

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

#### 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

8日間の日本訪問が終わった。この8日間で私たちは日本の生活や文化を様々な角度から体験し、日本の実状について知ることができた。日本への印象は人それぞれかも知れないが、ここでは今回の訪日における自分自身の感想を述べたいと思う。

日本に対する第一印象は人々が親切で、心から他人を思いやるということである。訪問先を離れる際の「ガラス拭き」、出会った際のこんにちとは、お別れの際のありがとう、これらの言葉は私たちの心を和ませるものである。日本人はまた常に他人を思いやる。ホームステイの2日間、ホストファザーは私の行きたい場所へ車で連れて行って来て、しかも何か私が興味を持つと、試してみるかと聞いてくれた。こうした優しさに私はとても感動した。

この他、日本の企業における社会的責任はとても高いものがあつた。見学した各企業において最も耳にした言葉は省エネと環境保全であつた。多くのメーカーでは、省エネや環境保全、リサイクルの方向性により企業自身が持続的な発展をしている。それに対して、中国ではこうした面の取り組みが不足しており、意識もまだ普及していない。日本企業の技術革新は今後次第にこうした環境保全の理念を中国にもたらし、そして中国の省エネや環境保全の技術の発展につながるものであり、これは中国の政府、企業そして人々も期待する変化だと信じている。

日中両国の交流は今後さらに深まっていく。未来の架け橋は私たちににかかっている。私は日中両国の関係はますます良くなっていくと信じている。

大学名： 中国農業大学

氏 名： 高潔

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本のマナーや思いやりは様々な角度から見ても気配りがとても行き届いている。以下にいくつか印象を述べる。

#### 1.マナーに関して

- ① 東京へ向かう飛行機への搭乗の際、歓迎の横断幕を掲げたスタッフが学生それぞれに挨拶をしていた。
- ② 「礼儀あるお別れの文化」、お別れの際は手を振って別れを惜しむ。視界から消えるまでその人を見送る。
- ③ 銀行では、書類記入の場所に3タイプの眼鏡が顧客用に設置されていた。
- ④ エスカレーターでは左または右に一列に並ぶ。お風呂で身体を洗う際は座ることでお湯が他人へかからないようにする。
- ⑤ 常に「お邪魔します、ありがとう、いただきます、美味しい、ただいま」などを口にする。
- ⑥ 買い物時の会計ではお金を指定の受け皿に置き、レジスタッフは商品を種類毎に包装する。

#### 2. 思いやりに関して

- ① 伝統的な礼儀が長く受け継がれている(ルールの慣れと幼少期の教育による感化)こうした踏襲は機械的また自然的なもので受け入れられやすい。なぜなら昔からこのようにしているため、たとえ自発的精神による行いではないとしても、正しい行いは正しい結果をもたらす。
- ② 日本人に受け継がれる「他人へ迷惑をかけない」という考えは、個人個人が自分のすべきことをするという、つまり秩序立っている。

- ③ 日本人に受け継がれる「責任感」、特にサービス業。各業界の発展モデルに共通する特徴は、すぐに次の発展を目指すのではなく、水平または下向きに細やかな気配りの大きな基礎を構築する。こうした業界意識により、サービス業はますますきめ細かいサービスが可能になり、発展するほど細やかになるというのは当然の流れだと言える。
- ④ 日本人に受け継がれる「謙虚と敬天愛人」の心。
- ⑤ 国民の高い素養＋自律。私にとって日本の印象は、穏やかで終始細心の注意を払っているということである。あらゆる部分に垣間見られる思いやりは驚くべきものである。日本のマナーや思いやりとは、強い自律によりもたらされる人々の関係性の薄さと、古い認識の踏襲への固執に近い継続が共に作用した結果である。いかなる原因や作用の結果であれ、これは私たちが学ぶべきものである。だが我が国の現在の情勢からは、まだ先が長いと思われる。

大学名： 中国農業大学

氏 名： 彭興偉

### テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

今回の訪日では、日本の「マナー」について実際にこの目で見る事ができたと思っている。訪問先の企業や大学ではとても手厚い歓迎を受け、バスで見学先を離れる際は、天気の如何に関わらず、彼らは皆私たちが視界から消えるまで別れを惜しんでくれた。こうしたマナーは普段の生活でも至る所で見られた。ホテル内でエレベーターに入る際、彼らは皆「すみません」と言い、地下鉄では人々は互いに頻繁に会釈をしていた。

ホームステイの2日間では日本の一般家庭、特に他人への思いやりについて一定の理解をすることができた。小倉さん一家は私のスケジュールを知っていたので、実際に会う前日も彼らから、スケジュールがタイトなのでしっかり休息をとり、身体に気を付けるよう私にメールが来ていた。小倉さん宅に到着し、私は自分の眼が乾いていることに気付いた。そして小倉さんの奥さんは、昼食後神社を散歩し、近くのスーパーで買い物をしてから帰って休もうと提案してくれた。これには私はとても感動した。2日目の朝はぐっすり眠る事ができ、10時近くになってようやく目が覚めた。少し申し訳なかったが、小倉さんは「良く眠れたようでよかった。今日のスケジュールはそれほどきつくないから、ここではリラックスしてほしい。」と言ってくれた。そのため小倉さん宅では、本当の日本人家庭の週末を体験することができた。お茶やピアノなど、それぞれが自分にとって心地良いものであった。

それからもう一つ。私たちが車を路肩に止め、小倉さんたちがクリスマスプレゼントを買いに行った時、奥さんと娘さんたちが突然車の窓を思いきり叩き始めた。私ははっきり知り合いでも見かけたのかと思っていたが、実は携帯電話を見つめ下を向き歩いている学生に対しての注意喚起であった。その時私はふと、あちこちの道路で見かける「携帯電話を見ながら道路を渡らない」の標識を思い出した。これは「知り合いではないが、共に支え合って生きている」という言葉が裏付けられたとても感動的な出来事であった。

大学名： 中国農業大学

氏 名： 雷超

### テーマ： 5.アニメなどのソフトパワー

知っての通り、日本のアニメ産業は発達しており、世界でも大きな影響力を持っている。そして私自身もアニメが好

きで、小さな頃から日本のアニメの影響を受けてきた。今回日本を訪れるにあたり、アニメ文化を体験したいというのが私の大きな願いの一つであった。

東京に着いてすぐ私は友人らと秋葉原へ向かった。ここではアニメ産業のビジネス化の高さを感じることができ、その興奮は言わずもがなであった。

私はアニメとは絵画や彫刻のような芸術で、思想を表現し、世界を反映する重要な手段だと思う。特に日本のアニメは、より私にそうした印象を与える。

例えば、法政大学の王敏教授のお話を通じて、私は宮崎駿監督のアニメは人と自然の関係を表現していることと、日本における森林の大切さについて知ることができた。また「神のような作品」と例えられる新世紀エヴァンゲリオン思想は計り知れないほど深く、こうした思想を強調した作品は作者が心血を注いで表現したいものであり、こうしたアニメを見ていると作者の意図を強く感じることができる。

この他、東京ではアニメ文化が至るところで垣間見られた。印象深かったのは3メートルの大きさのガンダムと様々なアニメ関連商品のショップであった。東京では「幼いころの思い出」に至る所で目にすることができ、これにも私たちの幼少期の成長におけるアニメの影響力の大きさが表れていた。

逆に中国では、アニメ産業はここ数年進歩をしてきたが、その発展のスピードは依然として緩い。ここで私は中国のアニメが日本に学ぶべきいくつかの点について話をしたい。最初は、著作権の尊重である。日本で私は作品自体が非常に保護されており、閲覧や観賞には一定の費用を支払うことを知った。対して中国では無料で作品観賞することが一般的で、そういった点を改善して作者自身に良好な生存環境を提供する必要がある。そして二つめは独創性である。中国のアニメは画風が日本と似ていて、ストーリー等は昔から代わり映えせず、目新しさが無い。三つめは中国のアニメの対象年齢が低く、青年や大人向けの作品がほとんどないが、日本では、中年の人でもアニメに大きな情熱を注いでいる。

中国のアニメ産業は小さくはないが、その中にはお金もうけを目的とした低レベルのアニメが多く存在しており、真に大衆の記憶に残る優れた作品は非常に少ない。全体として見れば、バブルの要素が大きく見かけ倒しだと言える。

**大学名： 国際関係学院**

**氏 名： 王蓉**

**テーマ： 3. マナーのよさと思いやり**

8日間の訪日活動は、あっという間に終わりを迎えた。日本では、その綺麗さや便利さなど多くのものが私を引き付けたが、中でも最も印象深かったのは、日本人の思いやりである。

訪日二日目、ホテルニューオータニ大阪での朝食の際、私は食後にコーヒーを飲もうとコーヒーが置いてある場所に行ったのだが、そこにはコーヒーカップが置かれていなかった。その時丁度一人の中年女性もコーヒーを飲もうとやってきたのだが、私たち二人ともコーヒーカップを見つけることができなかった。その後、その女性は離れた場所にコーヒーカップが置いてあるのを見かけ取りに行ったのだが、私は面倒になって自分の席に戻った。だがその女性は何とコーヒーカップを2つ持ち、わざわざ私の席を見つけて届けてくれたのである。これにはとても感動してしまった。本来私は彼女の知り合いではないのだから、彼女は自分の分だけを取るか、或いは私の姿が見えなくなったのだから、そのあたりに置いておけばよかったのに、彼女はわざわざ私の席を探して届けてくれたのである。彼女のこうした振舞いは、本当の優しさまた思いやりであり、非常に感動させられるものである。私は今でもあの女性の事が忘れられない。なぜならこれは私が日本で最初に体験した感動だったからである。

日本のサービススタッフは中国と比べ本当に礼儀正しく、ホテルのスタッフであれ、またはコンビニの店員であれ、お客に対していつも笑顔でとても優しく接する。彼らの笑顔を見るたび、私は心がとても和んだ。

日本人のマナーや思いやりというものに、私は本当に驚かされたが、彼らとの交流は心温まるものであった。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 杜佳蓉

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

訪日期間中、企業の見学を終えてその場を離れる時には、従業員の皆さんがゲートまで出て私たちを見送り、私たちのバスが出発しても彼らは私たちの姿が見えなくなるまで手を振り続けてくれた。ガイドの中島さんが言うには、これは日本人の見送りの際の習慣とのことである。

実のところ、今回の日本訪問以前にも私は日本人のこうした習慣について話に聞いていた。以前「日本大学生訪中団」を出迎えた際、彼らとお別れをする際は、彼らの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをするように先生から話があった。その時は先生の言うとおりに腕が疲れるまで手を振ったのだが、内心はここまでする必要はないと思っていた。

しかし今回日本を訪れ、自分が客の立場となり、日本人の人々から同様の温かい歓迎を受けた時、私の心は温かくなり、私たちも知らず知らずのうちに彼らに手を振っていた。これは一見儀式めいたマナーではあるが、実は自分が大事にされているという良い印象を客に与えるのである。これと同じことが日本のサービス業のスタッフにも言える。コンビニの店員からレストランのスタッフまで、皆が客に挨拶をし、親切な対応をする。これが客の気分を良くし、店自体の評判につながるという双方の関係性が構築される。マナーに気を配ることが相手に良い印象を残し、その後の両者の関係にプラスの影響を及ぼし、良好な基礎固めにつながるのである。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 曾粵儀

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

今回の訪日で最も印象に残ったのは、教育と人への重視の二つである。

私は広東省の小さな町出身だが、地元における教育面の資源は乏しく、町には常時閉館している博物館が存在しているだけであった。その後北京の大学に進学し、文化財や旧跡、科学博物館、音楽ホール、芸術センターなど北京の教育面の資源の「量」の大きさを強く認識するようになった。だが今回の日本訪問で私は、日本の教育面の資源の「質」の高さという新たな驚きを体感した。中国の教育は学校と学生が単に努力をしているが、日本の教育は立体的であり、学校、家庭、社会がいずれも人の教育に対してそれぞれの役割を果たしている。大阪大学の学生と共に討論をする際、皆が下書きの紙を囲み、あれこれ討論しながらポイントや考えなどをメモし、最後にそれらをマインドマップ形式にまとめるというやり方はとても印象深かった。学生による独立した思考、団結と協力、意見の発表を促し、「問題解決の方法」を教える、こうした点は中国の大学、ひいては小中高校も学ぶべきものである。また中国駐日大使館の参事官の方との交流において、私は日本の家庭教育の素晴らしさについて知り、自然とホームステイ時の様々なことが思い起こされた。ご両親は子供の自立能力や良い生活習慣・性格の育成にとっても気を配っていた。ホストファミリーは4歳の娘さんが自分で食べ物を切って食べるよう教え、ホストマザーは子供が遊んだおもちゃを子供自ら片付け、さらに夜9時には寝て朝7時に起きるよう教えていた。そして兄妹はご両親と共に40枚以上の折り紙で風車を作り皆に見せてくれた。これ以外に、各大企業での見学により、日本の社会や教育についての認識が得られた。日本航空であ



れ、またパナソニックエコテクノロジーセンターやトヨタ自動車元町工場であれ、見学した設備にはすべて説明プレートが低い位置に設置されており、さらに可愛い手引きの図が描かれ、子供が見学しやすいように設計されていた。これには中国の博物館などの見学場所における「孤高」に比べ、日本企業の社会教育への気配りが表れていた。私が育った環境にはこれらの「量」や「質」的条件はなかったが、今後の学習を通じて祖国の未来の教育環境に対し自分なりの貢献をしたいと思う。

日本人の人への重視もとても印象深かった。一つは自分への重視、もう一つは他人への重視である。日本人が自分のイメージを重視するというのは以前から聞いていたが、すべての男性が清潔そして爽やかで、すべての女性の身だしなみがしっかりしていて、歳を重ねても年齢に負けない美しさがある光景を直に目にし、やはり新鮮に感じられた。それに対して自分がなんの身だしなみもなくその場にいることが恥ずかしくなり、今後はしっかり身だしなみに気を使おうと決心した。日本人の他人への重視という感想については、企業見学の際のスタッフを見て得られたものである。パナソニックエコテクノロジーセンターでの最も汚れる仕事である「集塵除塵」はいずれも機械が行っていた。新大阪駅では清掃スタッフは腰を曲げて掃き掃除やごみ拾いをするのではなく、ハンディクリーナーを使い仕事をしている。箱根のホテル天成園では、屋外の清掃スタッフがシャベルで落ち葉を運ぶのではなく、風を吹き付ける機械(私は、あれがどういったものかは分からない)で落ち葉を一カ所に集めていた。あらゆる職業や業務に最も適した作業服があり、従業員の健康を守り、業務を快適なものにしている。日本は従業員の業務環境の改善に多額の経費を投じている。だが見学時の解説スタッフからは、機械によって良い環境を創り、従業員を大事にすることは会社に良い循環をもたらす。反対に従業員への思いやりを欠き、経費を減らすことは過当競争につながり長期の発展は望めないため、日本企業のこうしたやり方は必然であり、またそうすべきものだとの話があった。日本の近代化は中国より早く、中国よりも全面的で徹底されている。だからこそ、これまでの日本の成功や失敗はいずれも私たちの貴重な経験である。これから先日中両国の関係がますます良くなり、互いに助け合いながら未来の構築ができることを願っている。

**大学名： 国際関係学院**

**氏 名： 倪話秋**

**テーマ： 5.アニメなどのソフトパワー**

私自身は日本のアニメがきっかけで日本語の勉強を始めたこともあり、ここではソフトパワーについて自分なりの考えを述べてみたいと思う。

まず私は、アニメやドラマ、小説といった作品は、外国人に自国を知ってもらう上で一番ポピュラーな方式だと思う。実際に日本を訪れ、身を以って日本という国を感じているのはごくわずかであり、それでも大部分の人が持っている日本人は礼儀正しく、花見をして、温泉に浸かるといった印象は皆アニメやドラマなどからもたらされたものである。私自身もホームステイ期間中は秋葉原を訪れアニメ文化を体験し、アニメ映画を観たが、日本の若者自体も日本のアニメが好きであるということが分かった。これは私が述べたい第二点である。こうしたソフトパワーは、自国や自国の文化への帰属感を高めるものである。調査によると、日本の若者は自国である日本のドラマやアニメを観る傾向にあり、日本製のゲーム、特にモバイルゲーム、オンラインゲームなどはほぼ日本国内向けに販売されている。しかし、こうした点もまた日本の若者の中国への無関心につながっている。なぜなら彼らには中国との接点がなく、交流の必要がないとも言えるからである。若干上の世代の日本人にとっては、彼らの帰属感の多くは和式の服装や料理などに表れていると思う。この点については箱根で体験することができた。

だが実のところ、こうしたソフトパワーは日本が意図的に発展させたものではなく、文化的な表現方式の発展において、知らぬ間に自身の文化的思想が加わり、そうした文化が世界の若者を引き付けているのである。そのためもし中国が同様にソフトパワーを発展させたいと考えるならば、結局のところ中国自身の伝統文化や民族文化の真髄を再認

識し、その上でドラマなどにおける中国の若者から見てもネガティブな行為や思想を転換し、新たな発展を遂げた、目覚ましく進歩している中国を世界に示す必要がある。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 寇家璋

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

日本での8日間はあっという間に過ぎてしまったが、生涯記憶に残る沢山の思い出ができた。美しい景色やきれいな空気を堪能できた以外にも、ヒューマンケアがとても感動的であった。

私のホームステイ先のホストマザーは音楽関係の仕事に就いているため、音楽への造詣が深く、私が音楽好きと知るやすぐさまピアノの演奏をしてくれた。そして「花は咲く」という曲の演奏時、彼女は知らぬ間に歌い始め、それを聴いていた私はとても感動してしまった。林さんのアメリカ式の歌声に、この抑揚のあるゆったりとした曲が組み合わせ、それは本当に楽しいひと時であった。私はこれまで誰かが私一人のためにピアノを弾いてくれるとは思ってもなかったので、この日のことは生涯忘れないと思う。また林さんは、私が来年東京経済大学に交換留学に行くこと知りとても嬉しそうに、林さんの家は学校まで近いので、時間がある時にでもまた家に遊びに来て、と言ってくれた。それから留学先の学校と宿舎にも私に付き添い足を運んでくれた。彼女曰く、これで来年私が自分で東京に来た時でも順調だろうとのことであった。そしてホームステイが終わりお別れの際には、彼女は直筆の手紙と私の家族宛のプレゼントを私に持たせてくれた。私はその時正直思いも寄らなかった。わずか一泊二日のホームステイにもかかわらず、林さんはどれだけの時間をかけてこれらを準備したのか想像もつかなかった。いずれにしても、この一泊二日の触れ合いでは全く不自由がなく、あらゆることにおいて私への配慮があり、色々なことを私に細かく解説してくれた。

林さんは、私の訪日期间における代表的存在である。だが、この8日間の訪問において、私たちが立ち去る様子を見送ってくれた多くの人々の姿も脳裏に焼き付いている。私は、日本人の思いやりやマナーに学び、中国でそれらを広めていきたいと思う。